

お釈迦さまは、人生には、四つの苦しみがあるということと示しました。

それは、「生まれる」「老いる」「病になる」「死を迎える」ということです。老いる、病になる、死を迎えるという三つが苦しみになるといことは、容易に理解できると思います。しかし、なぜ「生まれること」が苦しみになるのでしょうか。

仏教には輪廻転生（りんねん）があります。命終えた後は、またどこか別の世界に生まれていくというものです。そこで死を迎えたらまた別の世界に生まれるのです。生まれながら死を迎え、同時にまた命を迎え死を迎えていくのです。それぞれの世界ではいろいろな苦しみを経験しなくてはなりません。肉体的な苦しみだけではなく、腹を立てたり、思い通りにならないというストレスを

感じて生きていくのです。繰り返しさまざまなストレスを感じるいのちの連続を断ち切って、仏に成る道を目指すのが仏教の考え方です。

いのちをいただくということはずべてのストレスの始まりなのです。このような考え方を示すと、生まれることを否定するのかとか、赤ちゃんとして産

「生まれる」という苦しみ

まれることはよくないことなのかという批判を想定することができます。

決してそうではありません。「命はそこあるだけで尊い」という仏教の教えもあります。そうになると、一見矛盾しているようにも思えます。

この世にいのちをいただくことは尊いことであると同時に、

すべての苦しみや悩みのはじまりです。この考え方を私たちに確認させるのが「生まれる苦しみ」という教えです。

「いのちはあるだけで尊い」という考えだけで社会生活を送ることができません。腹が立っても耐え、嫌いなこともやらなくてはならないし、人生は忍耐の連続です。生きていくことの大変さを感じるのと同時に素晴らしさと尊さを教えてくれるのが「生まれる苦しみ」という教えなのかもしれません。「苦しみ」と言われると、消極的なイメージを持つかもしれませんが、しっかりとこの世界に生まれたのですから、有意義に、大切に充実した人生を歩みたいと思いませんか？

山崎龍法

